

第1問

I すべりだす直前の最大の加速度の大きさを a とすると、運動方程式より、 $ma = \mu mg$

$$\therefore a = \underline{\mu g}$$

II (1) 剛体棒とともに円運動する観測者から見ると、剛体棒には重心の位置を作用点とする大きさ $m \frac{v_0^2}{R}$ の遠心力がはたらく。

路面と剛体棒の接触点を支点とした力のモーメントのつり合いより、

$$mg \frac{L}{2} \cos \theta = m \frac{v_0^2}{R} \cdot \frac{L}{2} \sin \theta \quad \therefore \tan \theta = \frac{gR}{v_0^2}$$

(2) 剛体棒とともに円運動する観測者から見ると、力のつり合いより、摩擦力の大きさは $m \frac{v_1^2}{R}$

すべりだす直前で速さが最大で最大摩擦力がはたらくので、 $m \frac{v_1^2}{R} = \mu mg \quad \therefore v_1 = \underline{\sqrt{\mu g R}}$

(3) 進行方向の摩擦力の成分の大きさ f' は、 $f' = ma$ である。

中心方向の摩擦力の成分の大きさは、ごく短時間の加速のため $m \frac{v_0^2}{R}$ と近似できる。

静止摩擦力の大きさは、進行方向と中心方向の成分を合成して、 $\sqrt{\left(m \frac{v_0^2}{R}\right)^2 + (ma)^2}$

(4) すべりだす直前で加速度の大きさ最大なので、 $\sqrt{\left(m \frac{v_0^2}{R}\right)^2 + (ma)^2} = \mu mg$

$$\therefore a = \underline{\sqrt{(\mu g)^2 - \left(\frac{v_0^2}{R}\right)^2}}$$

III (1) 剛体棒とともに円運動する観測者から見ると、剛体棒には $m \frac{v_0^2}{R}$ の遠心力がはたらく。

路面と剛体棒の接触点を支点とした力のモーメントのつり合いより、

$$mg \frac{L}{2} \cos \theta = m \frac{v_0^2}{R} \cdot \frac{L}{2} \sin \theta \quad \therefore \tan \theta = \frac{gR}{v_0^2}$$

(2) すべりだす直前で速さが最大で、静止摩擦力は最大摩擦力になる。路面からはたらく垂直抗力の大きさを N とする。

路面に平行な方向の力のつり合いより, $\mu N + mg \sin \varphi = m \frac{v_2^2}{R} \cos \varphi$

路面に垂直な方向の力のつり合いより, $N = mg \cos \varphi + m \frac{v_2^2}{R} \sin \varphi$

2式より, $v_2 = \sqrt{\frac{\mu + \tan \varphi}{1 - \mu \tan \varphi} gR}$

- (3) $\frac{v_2}{v_1} = \sqrt{\frac{1 + \frac{1}{\mu} \tan \varphi}{1 - \mu \tan \varphi}} > 1$ となるので, 勾配がついていると, より大きな速さで等速円運動ができるため。

第2問

I 微小な時間 Δt 内に導体棒が横切る部分の面積は $\frac{1}{2}l^2\omega_1 \cdot \Delta t$ となり、ここを貫く磁束は $\Delta\Phi = \frac{1}{2}Bl^2\omega_1 \cdot \Delta t$

となる。ファラデーの電磁誘導の法則より、導体棒に生じる起電力の大きさは、

$$E_1 = \frac{\Delta\Phi}{\Delta t} = \frac{1}{2}Bl^2\omega_1 \quad \text{ゆえに、} \quad \alpha = \frac{1}{2}Bl^2$$

II (1) 導体棒を流れる電流の大きさは、 $I = \frac{V}{R}$

よって、導体棒が磁場から受ける力の大きさは、 $IBl = \frac{VBl}{R}$

したがって、導体棒にはたらく力のモーメントの大きさは、 $IBl \cdot \frac{l}{2} = \frac{VBl^2}{2R}$

(2) (あ)

(3) 導体棒の角速度が一定となっているので、導体棒にはたらく力のモーメントが0となっている。すなわち回路に流れる電流が0となっているので、キルヒホッフの第2法則より、

$$V = \alpha\omega_2 \quad \text{よって、} \quad \omega_2 = \frac{V}{\alpha} = \frac{2V}{Bl^2}$$

III 導体棒に生じる誘導起電力の大きさは $\alpha\omega_3$ なので、コンデンサー1に蓄えられている静電エネルギーは

$$\frac{1}{2}C_1(\alpha\omega_3)^2 = \frac{1}{8}C_1(Bl^2\omega_3)^2$$

IV (1) 導体棒に生じる誘導起電力の大きさは $\alpha\omega$ なので、静電エネルギーは $\frac{1}{2}Q_2(\alpha\omega)$ となる。よって、

$$\frac{1}{2}Q_2(\alpha\omega) = \frac{1}{2}\beta\omega^2 \quad \text{より、} \quad Q_2 = \frac{\beta}{\alpha}\omega \quad \text{また、} \quad C_2 = \frac{Q_2}{\alpha\omega} = \frac{\beta}{\alpha^2}$$

(2) 十分時間が経過した後、2つのコンデンサーの電圧は等しいので、それを V' とする。コンデンサー1とコンデンサー2に蓄えられた電荷の和は変化しないので、

$$C_2V = (C_1 + C_2)V' \quad \text{よって、} \quad V' = \frac{C_2}{C_1 + C_2}V$$

コンデンサー1に蓄えられている静電エネルギーは、 $\frac{1}{2}C_1V'^2 = \frac{C_1C_2^2}{2(C_1 + C_2)^2}V^2$

(3) $\frac{1}{2}C_1(\alpha\omega_3)^2 = \frac{C_1C_2^2}{2(C_1 + C_2)^2}V^2$ より、 $\omega_3 = \frac{C_2V}{\alpha(C_1 + C_2)}$

第3問

- I(1) レンズと物体の距離を a , レンズと実像の距離を b , 焦点距離を d とすると物体と実像とレンズの位置関係を表すレンズの式は

$$\frac{1}{a} + \frac{1}{b} = \frac{1}{d}$$

である。レンズと物体の距離 a が十分に大きければ $\frac{1}{b} \doteq \frac{1}{d}$ となるので、 $b = d$ とすればよい。

(2) (ア) $h = \frac{Hd}{D}$, (イ) 長い (b)

- (3) L_3 の焦点距離を f とすると、物体と像と凹レンズの位置関係を表すレンズの式より

$$\frac{1}{-d} + \frac{1}{3d} = \frac{1}{-f} \quad \text{となるので、} \quad f = \underline{\underline{\frac{3}{2}d}}$$

$$L_3 \text{ と光線 } \textcircled{\text{あ}} \text{ の交点の光軸からの距離は } \frac{w}{5} \text{ になる。} \quad \tan \alpha = \frac{\frac{w}{5}}{3d} = \frac{w}{15d}$$

(4) 求める焦点距離を f' とすると $\frac{w}{f'} = \tan \alpha$ でなければならないので、 $f' = \underline{\underline{15d}}$

- (5) 単一の凸レンズの場合よりもレンズとスクリーンの距離を短くできる。

II(1) $\overline{W_2Q} = \sqrt{(d \cos \beta - x)^2 + (d \sin \beta - y)^2}$

$$= d \sqrt{1 - 2 \left(\frac{x}{d} \cos \beta + \frac{y}{d} \sin \beta \right) + \left(\frac{x}{d} \right)^2 + \left(\frac{y}{d} \right)^2},$$

$$\overline{W_1Q} = \sqrt{(d - x)^2 + y^2} = d \sqrt{1 - 2 \frac{x}{d} + \left(\frac{x}{d} \right)^2 + \left(\frac{y}{d} \right)^2} \text{ なので}$$

$$\left| \frac{x}{d} \right|, \left| \frac{y}{d} \right| \ll 1 \text{ より、これらの2乗の項を無視する近似を用いて}$$

$$\overline{W_2Q} \doteq d - (x \cos \beta + y \sin \beta), \quad \overline{W_1Q} \doteq d - x$$

$$\Delta L = \overline{W_2Q} - \overline{W_1Q} = \underline{\underline{x(1 - \cos \beta) - y \sin \beta}}$$

(2) II(1)より $x = 0$, $\Delta L = \frac{\lambda}{2}$ を代入して、 $|y| = \underline{\underline{\frac{\lambda}{2 \sin \beta}}}$

$$(3) \tan\beta = \frac{R}{d} = \frac{5}{12} \text{ より } \sin\beta = \frac{5}{13}, \quad \text{ボケの大きさは } \frac{5.0 \times 10^{-7}}{2 \times \frac{5}{13}} = \underline{6.5 \times 10^{-7} \text{ m}},$$

像と物体の大きさの比は $\frac{D}{d}$ なので,

$$\text{物体上でのボケに対応する大きさは } \frac{1.2 \times 10^2}{12 \times 10^{-2}} \times 6.5 \times 10^{-7} = \underline{6.5 \times 10^{-4} \text{ m}}$$

$$(4) \text{II(1)より } y = 0, \quad \Delta L = \frac{\lambda}{2} \text{ を代入して, } x = \underline{\frac{\lambda}{2(1 - \cos\beta)}}$$